

<p>■品詞</p> <p>形ク 形容詞・ク活用</p> <p>形シク 形容詞・シク活用</p> <p>形動ナリ 形容動詞・ナリ活用</p> <p>名 名詞</p> <p>代 代名詞</p> <p>副 副詞</p> <p>連体 連体詞</p> <p>接 接続詞</p> <p>感 感動詞</p> <p>*動詞・助動詞は示さない。</p> <p>■動詞</p> <p>四 四段活用動詞</p> <p>上二 上二段活用動詞</p> <p>下二 下二段活用動詞</p> <p>上 上二段活用動詞</p> <p>上 上二段活用動詞</p> <p>下 下二段活用動詞</p> <p>下 下二段活用動詞</p> <p>カ変 力行変格活用動詞</p> <p>サ変 力行変格活用動詞</p> <p>ナ変 力行変格活用動詞</p> <p>ラ変 力行変格活用動詞</p> <p>*アソワ・ガ・ザ・ダ・バは、活用の行</p>	<p>■活用形</p> <p>未 未然形</p> <p>用 連用形</p> <p>終 終止形</p> <p>体 連体形</p> <p>已 已然形</p> <p>命 命令形</p> <p>■助動詞</p> <p>自 自発の助動詞</p> <p>可 可能の助動詞</p> <p>受 受身の助動詞</p> <p>尊 尊敬の助動詞</p> <p>使 使役の助動詞</p> <p>過 過去の助動詞</p> <p>完 完了の助動詞</p> <p>存 存続の助動詞</p> <p>強 強意の助動詞</p> <p>詠 詠嘆の助動詞</p> <p>推 推量の助動詞</p> <p>意 意志の助動詞</p> <p>適 適當の助動詞</p> <p>勸 勧誘の助動詞</p> <p>婉 婉曲の助動詞</p> <p>仮 仮定の助動詞</p> <p>当 當然の助動詞</p>	<p>現推 現在推量の助動詞</p> <p>過推 過去推量の助動詞</p> <p>原推 原因推量の助動詞</p> <p>過伝 過去の伝聞の助動詞</p> <p>過婉 過去の婉曲の助動詞</p> <p>反想 反実反想の助動詞</p> <p>推定 推定の助動詞</p> <p>伝 伝聞の助動詞</p> <p>断 断定の助動詞</p> <p>存在 存在の助動詞</p> <p>消推 打消推量の助動詞</p> <p>消推 打消推量の助動詞</p> <p>消意 打消意志の助動詞</p> <p>消当 打消當然の助動詞</p> <p>不 不適當の助動詞</p> <p>禁 禁止の助動詞</p> <p>不可 不可能の助動詞</p> <p>願 願望の助動詞</p> <p>比 比況の助動詞</p> <p>■助詞</p> <p>格助 格助詞</p> <p>接助 接続助詞</p> <p>副助 副助詞</p> <p>係助 係助詞</p> <p>終助 終助詞</p> <p>間助 間投助詞</p>	<p>■係り結び</p> <p>(係) 係りの語</p> <p>(結) 結びの語</p> <p>↓結略 結びの省略</p> <p>↓結消 結びの消去</p> <p>■敬語</p> <p>(尊) 尊敬語</p> <p>(謙) 謙讓語</p> <p>(丁) 丁寧語</p> <p>(尊補) 尊敬の補助動詞</p> <p>(謙補) 謙讓の補助動詞</p> <p>(丁補) 丁寧の補助動詞</p> <p>■音便</p> <p>(イ) イ音便</p> <p>(ウ) ウ音便</p> <p>(撥) 撥音便</p> <p>(促) 促音便</p> <p>(撥・無) 撥音・無表記</p> <p>■その他</p> <p>(枕詞) 枕詞</p> <p>(+接尾) +接尾語</p> <p>幹 語幹</p>
---	---	---	--

第1日 古文と現代文

解答

- 1 (1) いわ (2) おもう (3) はじ (4) いずれ
 (5) いなか (6) えがお
- 2 (1) ①月の初め。 ②月の第一日。
 (2) ①月の終わり。 ②月の最終日。
 (3) 朝から晩まで。一日中。
 (4) 夜通し。一晩中。
 (5) ①通り過ぎてきた方向。 ②過ぎ去った時。過去。
 (6) ①進んで行く先。 ②これから来る時。将来。
 (7) ①月がまだ空にあるままで、夜が明けようとするころ。
 ②夜が明けて、まだ空に残っている月。残月。
 (8) ①月の出ている夕方。 ②夕方の月。夕月。
- 3 (1) 起く (2) 過ぐ (3) 寄す (4) 眺む (5) 滅ぶ
 (6) 下る (7) 捨つ (8) 別る (9) 報ゆ (10) 尋ぬ
- 4 (1) 少なし (2) ゆかし (3) めでたし (4) うつくし

解説

1 「歴史的かなづかい」は、平安時代中期以前の古典に基準をおいたかなづかいです。また、「現代かなづかい」は、現代の言葉をだいたいの発音どおりに書き表すときのきまりです。ですから、両者の間には当然細かな違いが出てきます。

歴史的かなづかいで文章を書く必要はほとんどないと思いますが、これから古典を読んでいく時に、見慣れないかなづかいは、対応する現代かなづかいを思い浮かべられるようにしておきましょう。そうすれば、

2 読みでつまづくことは少なくなるでしょう。

3 古語辞典の見出し語は、活用語の場合、原則的には基本形(終止形)です。文中で用いられているかたちを基本形に戻せないと、意味を調べることはできません。

4 同じく、形容詞の場合です。

古文に用いられている形容詞には、活用の種類として二種類あるのですが(↓第6日)、いずれも「し」で終わるのが特徴です。

なお、形容動詞は、活用語尾を除いた語幹だけで引けますから、このような操作は必要ありません。

たとえば、「あはれなり」「あはれに」「あはれなれ」などと出てきたら、「あはれ」で引けますし、「堂々たり」「堂々たる」などであっても、「堂々」だけで引けばよいわけです。